



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	学校不適應研究における動向—「原子価論」からの再考 The Trend in School Maladjustment Research: A Critical Review from Valency Theory
Author(s)	黒崎 優美 (KUROSAKI Hiromi)
<i>Citation</i>	神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇 Journal of the Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University , No.1 : 29-43
Issue Date	2012
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

学校不適応研究における動向——「原子価論」からの再考

黒崎 優美

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: kurosaki@shoin.ac.jp

The Trend in School Maladjustment Research: A Critical Review from Valency Theory

KUROSAKI Hiromi

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本稿の目的は、多くの実証的研究で用いられている学校不適応尺度の項目内容を、精神分析、特に原子価論 (Hafsi, 2010) の頂点に基づき検討し、学校において不適応とみなされている言動や態度の内容を明らかにし、学校不適応研究の課題と今後の方向性を提示することである。主観的学校不適応感尺度 (戸ヶ崎ら, 1997)、「学校生活満足度尺度」(河村ら, 1999)、そして「学校不適応観尺度」(淵上ら, 2001) の3尺度について検討した結果、原子価4類型のうち、「闘争」や「逃避」に相当する特性がより不適応的に、「依存」や「つがい」に相当する内容がより適応的に評価されていること、また各原子価におけるプラスとマイナスの特性が混同されている可能性のあることが分かった。このような偏りが生じている要因として、子どもや教師が適応／不適応を評価する際に、自身の原子価、および学級や学校の集団風土、あるいは基底的理想の影響を受けている可能性が挙げられる。従って、今後の研究において、教師や子どもの原子価と不適応観との関係、さらに、学級や学校集団の雰囲気や暗黙的なルールを規定している基底的理想と不適応観との関係を明らかにする必要があると考えられる。

キーワード：Bion、原子価、マイナス原子価、学校不適応、基底的理想グループ

Key Words: Bion, valency, minus valency, school maladjustment, basic assumption group

1. 問題と目的

児童期・青年期の子どもの多くが、自宅以外で最も長い時間を過ごす場である学校は、それらすべての子どもにとっての居場所となり、心身の成長・発達を助けることを期待されている。従って、学校不適応とは、学校という環境に適応できない個人を生み出している「集団全体」(group as a whole)の問題でもある。そして、学校不適応の問題は、依然深刻な状況が続いている(文部科学省, 2009)。

筆者は、集団の一形態である家族全体において不登校という学校不適応が発生するメカニズムとその役割を、精神分析、特に Bion (1961) による集団理論の頂点から明らかにした(黒崎, 2009 他)。それによれば、不登校とは、家族集団全体において抑圧されている逃避的な対象関係や要求の表現・充足という疾病利得を伴う集団病理である。それは、主に家族要因に焦点を当てたものであるが、家族集団と同様、集団としての学校における逃避的要求の抑圧と不登校発生との関連が示唆された。

学校において逃避的な対象関係や要求が抑圧されているならば、それと関連する言動や態度は不適応的なものとして扱われていると考えられる。そこで、本稿では、多くの実証的研究で用いられている学校不適応尺度に注目し、これらの項目内容を検討することによって、学校において不適応とみなされている言動や態度の内容を明らかにするとともに、今後の学校不適応研究について一定の方向性を示すことを目的とする。

2. 学校不適応に関する研究と尺度

学校を含む一定の環境に対する適応・不適応を理解するためには、相互作用の視点が不可欠である。なぜなら、不適応とは、そのように評価する側とされる側との相互作用による産物と考えられるからである。より具体的にいえば、評価が変わることによって、同じ言動や態度が適応的なものにも不適応的なものにもなり得るということになる。例えば不登校は、学校においては不適応行動の一つとみなされるが、多くのフリースクールでは主体的な選択として尊重され適応的な行動として扱われており、これとも絡んで、学校における不登校の評価も 1980 年代以降大きく変わってきている(朝倉, 1995)。従って、本稿においても、子どもにとっての不適応と、教師の目からみた子どもの不適応との両方を扱う必要がある。そういった観点で行われた研究は多くはないが、前者は「学校不適応感」、後者は「学校不適応観」と呼ばれることが多いようである。従って、本稿もそれにならい、以下、それぞれの立場で行われた研究と開発された尺度について簡単にまとめておきたい。

1) 学校不適応感に関する研究と尺度

主に子どもを対象とし、子どもにとって、学校に適応している／していないの判断や評価の基準となっているのがどのような言動や態度なのか、また、それに基づき、自身の学校適応度をどのように評価しているのかといったことを対象にしているのが、学校不適応感研究である。

学校不適應感そのものに焦点を当てた研究は多くはないが、学校満足度や学校ストレスなど近接する領域の研究も含め、ここでは学校不適應を調査内容に含む研究で多く用いられている2つの尺度、すなわち「主観的学校不適應感尺度」(戸ヶ崎ら, 1997)、および「学校生活満足度尺度」(河村ら, 1999)を取り上げる。

主観的学校不適應感尺度(戸ヶ崎ら, 1997)は、既存の複数の尺度から項目を抽出し、特に子どもの主観的な不適應感を測定するために開発された、5件法による質問紙尺度である。本尺度は全15項目であり、「友だちとの関係」(5項目)、「先生との関係」(5項目)、および「学業場面」(5項目)の3下位尺度で構成されている。

学校生活満足度尺度(河村, 1999)は、子どもの自由記述回答をKJ法を用いて分類し作成された、子どもが学校にどの程度満足しているかを測定するための5件法による質問紙尺度である。本尺度は、作者も述べているとおり、子どもと教師双方に抵抗感の強い項目が除かれていること、短時間での施行が可能なこと、要支援群の特定など得られた結果を生かしやすいことから、研究者だけでなく、教育現場でも多く用いられている。本尺度は全20項目であり、自分の存在が級友や教師に受け入れられ認められているか否かを示す「承認得点」(10項目)、および、不適應感やいじめ・冷やかしなどを受けているか否かを示す「被害・不適應得点」(10項目)の2下位尺度で構成されている。各下位尺度得点の組み合わせにより、「学校生活満足群」(高承認、低侵害)、「侵害行為認知群」(高承認、高侵害)、「非承認群」(低承認、低侵害)、「学校生活不満足群」(低承認、高侵害)の4群に分類され、学校生活不満足群のうち、特に承認得点が低く、被害・不適應得点の高い一群が「要支援群」とされる。

2) 学校不適應観に関する研究

主に教師を対象とし、教師からみて、子どもが学校に適應している／していないの判断や評価の基準となっているのがどのような言動や態度なのか、また、それに基づき、子どもの学校適應度をどのように評価しているのかといったことを対象にしているのが、学校不適應観研究である。

学校不適應観に関する研究は、学校不適應感に関する研究よりさらに少ないが、それは、教師とは常に冷静で、公正・公平に子どもを評価し対応できるべきであり、またできるものであるとする、いわゆる「教師聖職論」(小島ら, 2002)の影響によるところが大きいと考えられる。しかし、教師の個人差に言及した研究がいくつかあるので、それらを概観した上で、淵上ら(2005)によって注目され作成された学級不適應観尺度とそれを用いた応用研究について述べる。

小川(1956)は、教師が日常的に用いる「行動の記録」を素材として用いることにより、人気児童に比べ、排斥児童や孤立児童の認知に子どものそれとの不一致度が大きいことを示した。具体的にいえば、教師は子どもを評価する際学業成績により比重をおく傾向があり、学業成績が低い人気児童や学業成績の高い排斥児童などは見落とされたり見誤られている可能性のあること、また、排斥児童と孤立児童とが分化されていないことなどを明らかにした。勝崎ら(2005)は、不登校のタイプによって教師の認知や対応に違いがあり、「自己中心性」

や「怠惰」などの努力要因において、怒りの感情が高得点を示すことを明らかにした。これらの研究は、教師の子どもを見る目は学業成績や不登校の態様評価の影響を受け歪められている可能性のあることを明らかにした。

河村ら(1997)は、自ら開発した「教師特有の指導行動を生むイラショナル・ベリーフ尺度」(1996)を用いて、担任教師の「ねばならない」型のイラショナル性の高い管理意識ベリーフと子どもの不適応感との関連を明らかにした。これは、上述した教師聖職論の否定的側面を明らかにした研究ともいえる。

淵上ら(2005)は、教師の不適応観そのものに着目し、尺度開発、および多くの応用研究を行っている。彼らの開発した「学校不適応観尺度」(2001)は、教師の自由記述回答をKJ法を用いて分類し作成された、教師から不適応とみなされる子どもの言動や態度の内容と程度を測定するための5件法による質問紙尺度である。本尺度は全46項目であり、他者に対する攻撃性を重視する「外的攻撃性重視タイプ」(15項目)、対人的なスキルの欠如を重視する「非社会性重視タイプ」(12項目)、行動特徴や性格特性を重視する「性格特性・心身の安定性重視タイプ」(8項目)、「授業・学習規律性重視タイプ」(8項目)、そして「逃避的行動重視タイプ」(3項目)の5下位尺度で構成されている。さらに、本尺度を用いた応用研究により、学級不適応観の違いが指導や対応に及ぼす影響が明らかにされている。それによれば、外的攻撃性重視タイプの教師は、集団統制を重視する一方で子どもの内面には注意が向きにくく、非社会性重視タイプの教師は、子どもへの配慮が行き届く一方で集団をまとめるのは苦手であり、授業・学習規律性重視タイプの教師は、集団の共通性や学習指導に長けている一方、子ども一人一人への配慮に欠けたところがみられる。そして、5つすべてを重視するタイプの教師が、子どもの多様な面に対応でき、また子ども一人一人の個性を重視した対応ができるとされる。

次に、これらの尺度項目内容を検討するために、対人間における相互作用の類型を規定する個人的機能である「原子価」の理論について概観する。

3. 原子価論の概要

精神分析家であるBion, W(1961)は、その集団理論のなかで、集団は常に意識的で現実的な側面である「作動グループ」(work group)と、それを無意識的で幻想的、そして作動グループ活動を阻止するよう動く側面である「基底的想定グループ」(basic assumption group)との共存によって構成されていると主張した。そして、グループのメンバーである個人は、「協同指標」(cooperation tendency)および「原子価」(valency)によってグループの各側面に貢献することができると考えた。Hafsi, M(2010)は、Bionの提示した原子価概念をさらに発展させ、その類型(依存、闘争、逃避、つがい)や発生論、さらに「マイナス原子価」(minus valency)という新たな概念を提示している。以下、原子価の各類型の特徴、およびマイナス原子価について簡単に説明する。Hafsiによれば、原子価とは「(外部的、内部的)対象との一定の安定した形(類型)による繋がりと関係を可能にする個人的な心的(無意識的)準備状態」を表す。すなわち、あらゆる内的・外的対象関係のあり方は、原子価の類型によって規定されるのである。以下、各原子価類の特徴について簡単に述べる。

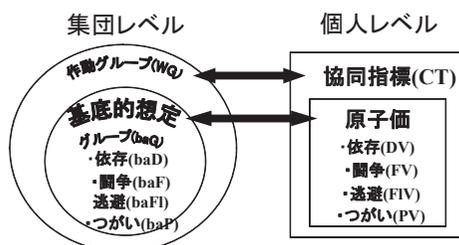


図1. Bionによる集団論におけるグループと個人との関係

1) 依存原子価

「依存原子価」(dependency valency: 以下、DV) の人、すなわち活動的原子価として DV を有する人は、「縦的な対人関係」(Hafsi, 2008; p. 93, 筆者訳) を築こうとする傾向が強い。それは、DV の人は自己評価が低く、独力で何かを成し遂げられるとは考えられないため、常に助けを必要とし、またその相手から認められたいと強く願うためである。また、DV の人の対人関係には、利他主義的で自己犠牲的な特徴もみられるが、これは「投影同一化」(projective identification) により排出された自身の依存的要求を他者の内に認め、それらの要求を満たそうとするからである。つまり、DV の人は、自身と同様、他者からの援助要求を敏感に察知し、時にはそのような存在をつくり出し、保護したり援助することによって、頼るだけでなく頼られることによって縦的な対人関係を築き、そのなかで愛情や賞賛等の要求を満たそうとするのである。

2) 闘争原子価

「闘争原子価」(fight valency: 以下、FV) の人は、「対峙的な対人関係」(Hafsi, 2008; p. 117, 筆者訳) を築こうとする傾向が強い。FV の人は、不信感を抱きやすく競争意識が強いため、すべての人を敵、あるいは競争相手として認識する傾向がある。さらに、相手に対する敵意や攻撃性を、批判や自己主張によって率直に表明しようとする。従って、FV の人の第一印象は、遠慮がなくずけずけものを言うような感じである。また FV の人は、自己評価が高く自信のあるような印象を周囲に与え、実際に自他に対して厳しいところがある。行動力や決断力に優れている反面、自己中心的で自他の弱さや敗北を受け入れにくい。

3) つがい原子価

「つがい原子価」(pairing valency: 以下、PV) の人は、「親密な対人関係」(Hafsi, 2006; p. 95, 筆者訳) を築こうとする傾向が強い。その原型は性的関係にあり、従って、PV の人の対人関係には、しばしば性的な魅力や誘惑が含まれる。PV の人は、明るく陽気で、親しみ易く、打ち解けた振る舞いで周囲を楽しませるような印象を与える。また、PV の人は、楽観主義的な考え方で、失敗しても希望を失わず、いずれすべてはうまくいくと考える傾向が強い。また、「人類皆兄弟」といったスローガンにみられるような、民主主義的、平和主義的な傾向が強く、この信念に一致するよう行動する。

4) 逃避原子価

「逃避原子価」(flight valency: 以下、FIV) の人は、「葛藤回避」(Hafsi, 2006; p. 94, 筆者訳) 的な対人関係を築こうとする傾向が強い。FIV の人にとって、葛藤状況は、対人関係を危険に晒すようなものであり、従って可能な限りそういった状況を避けようとする。そのため、FIV の人は、対人関係において、互いのプライバシーを尊重する傾向が強い。また、FIV の人にとって「出る杭は打たれる」の諺は真実であり、従って、FV の人と異なり他者の上に立つことを好まず、また DV の人と異なり、他者に頼ることを好まない。FIV の人にとってより重要なことは、自己充足であり、FIV の人が独立した印象を与えるのはそのためである。

5) 協同指標

「協同指標」(Cooperation tendency: 以下、CT) は、原子価とは対照的な個人的能力を表す概念である。原子価が基底的想定グループに貢献するための無意識的で即時的な能力であるのに対して、協同指標は作動グループに貢献するための意識的で努力を要する能力である。協同指標を用いて、個人は自らの原子価をコントロールし、集団の課題に向けた活動に参加するすることが可能となる。

6) マイナス原子価

Bion (1961) によれば、原子価は植物の向性にも似た本能的な機能であり、「この価がなくなるということは、人間であることを中止することである」(p. 108)。つまり、精神的に生きている限り、人は原子価を有しており、それによって対象と繋がろうとする。しかし、人は常に対象との繋がりを維持できるわけではなく、Bion (1958) のいう「精神病的パーソナリティ」(psychotic personality) が支配的になっている場合には、あらゆる内的、および外的対象の繋がりが、すなわち「連結」(links) は攻撃・破壊され、「奇怪な対象」(bizarre objects) との繋がりが強化されるようになる。

Hafsi (2006) は、このような病理的な対象関係、あるいは原子価の機能の仕方を説明するためにマイナス原子価という新しい概念を提唱し、その発生論や病理学に言及している。それによれば、Bion (1961) のいう原子価に相当するのは、健康的、あるいは「プラス原子価」(plus valency) であり、正常な対象(対人)関係の特徴を表す。これに対してマイナス原子価は、原子価の逆機能、つまり「主体が一方的に対象と繋がろうとすることによって対象(対人)との関係を破壊し、結果として、対象と繋がらなくなる」(Hafsi, 2006 ; p. 102, 筆者訳) という病理的な対象(対人)関係の特徴を表す。より具体的にいうならば、プラス原子価が機能しているとき、その人は1つの「活動的原子価」(active valency) と、3つの「補助的原子価」(auxiliary valencies) とをもっている。通常は主に活動的原子価が用いられるが、それによって対象と繋がることのできない場合には、補助的原子価を一時的に用いることによって対象との繋がりを築いたり、維持、強化することができるのに対し、マイナス原子価は、原子価の逆機能に相当する状態を表す。つまり、原子価が対象との繋がりを可能にするのに対し、マイナス原子価は繋がりを破壊したり、破壊的な繋がりを維持・強化しようとする傾向をもつ。

Hafsi (2010) によれば、マイナス原子価には、「過少」「未分化」「過度」の3つの類型があるが、本稿と関連の深いのは未分化の原子価であるので、ここではそれについてのみ簡単に述べる。未分化の原子価とは、1つの原子価のみを用いて対象と繋がろうとするが、相手や状況に応じた適切な原子価を示すことができないために対象と繋がることができない状態を表す。未分化の原子価には、原子価と同様「依存」(-DV)、「闘争」(-FV)、「つがい」(-PV)、「逃避」(-FIV)の4つの類型があるが、何れも、プラス原子価と異なり、その特徴が極端なかたちで現れ他の原子価の特徴がみられなくなるという共通特性をもっている。未分化の原子価が支配的な場合、その人は欲求不満への耐性が極めて低く、従って「経験から学ぶ」(learning from experiences) 能力をもたないために、活動的原子価によってのみ対象と繋がろうとする試みを繰り返し、その結果として、ますます対象と繋がることができなくなるという悪循環に陥る。つまり、原子価の構造が多原子価的であるのに対し、未分化のマイナス原子価は単原子価の構造をもっている。

4. 原子価論に基づく学校不適応尺度項目の検討

前述したように、本稿の目的は、既存の学校不適応尺度の項目内容を検討することによって、学校において不適応とみなされている言動や態度の内容を明らかにすることである。ここでは、上に紹介した学校不適応感に関する2尺度、および、学校不適応観に関する1尺度について、原子価論の頂点から検討を行う。

表1. 協同指標および各原子価に対応する学校不適応感尺度項目

協同指標・原子価	尺度項目
協同指標(Co)	(主-13)勉強なんかどうでもよいと思っていますか。(*) (主-14)テストのことを考えると、いやでたまらなくなりますか。(*) (満-6)クラスで行う活動には、積極的に取り組んでいる。
依存原子価(DV)	(主-6)先生は、なんでもよくわかるように教えてくださいませんか。 (主-7)先生は、あなたのいうことをよく聞いてくれますか。 (主-8)先生は、あなたがしつぱいしてもばかにしないで、親切に教えてくださいませんか。 (主-9)担任の先生が休むと、さびしいと思いますか。 (満-3)自分を頼りにしてくれる友人がいる。 (満-7)学校内で私を認めてくれる先生がいると思う。 (満-9)自分が何かをしようと思ったとき、協力してくれるような友人がいる。
マイナス依存原子価(-DV)	(主-11)勉強をやる気がなくて、もうだめだと思いませんか。(*) (満-18)クラスにいるときや部活をしているとき、まわりの目が気になって不安や緊張を覚えることがある。(*)
闘争原子価(FV)	該当項目なし
マイナス闘争原子価(-FV)	(主-1)あなたは、クラスの友だちからきらわれていると思いませんか。(*) (主-3)友だちは、よくあなたの悪口をいっていると思いませんか。(*)
つがい原子価(PV)	(満-4)学校やクラスでみんなから注目されるような経験をしたことがある。 (満-10)学校内に自分の本音や悩みを語る友人がいる。
逃避原子価(FIV)	(主-10)先生は、自分の考えをおしつけすぎていると思いませんか。(*) (主-12)きらいな授業がある日には、学校を休みたいくなりますか。(*) (主-15)早く授業が終わらないかと、思うことがありますか。(*) (満-17)休み時間などに、ひとりであることが多い。(*) (満-19)学校に行きたくないときがある。(*) (満-20)私はクラスメートの友人関係についてあまり知らない。(*)
マイナス逃避原子価(-FIV)	(主-2)あなたは、このクラスで、のけものにされているような気がしますか。(*) (満-15)クラスで班をつくる時など、なかなか班に入れず、残ってしまうことがある。(*) (満-16)クラスの中で浮いていると感じることがある。(*)
不特定	(主-4)友だちは、あなたのことをしんようしていないと思いませんか。(*) (主-5)あなたのクラスには、あなたのしつぱいをよるこぶ人がいますか。 (満-1)勉強や運動、特技やひょうきんさなどで友人から認められていると思う。

<p>(満-2)私はクラスの中で存在感があると思う。</p> <p>(満-5)自分の考えがクラスや部全員の意見になることがある。</p> <p>(満-8)仲のよいグループのなかでは中心的なメンバーである。</p> <p>(満-11)クラスの人から無視されるようなことがある。(*)</p> <p>(満-12)クラスや部活でからかわれたり、ばかにされたりするようなことがある。(*)</p> <p>(満-13)授業中に発言をしたり先生の質問に答えたりするとき、冷やかされることがある。(*)</p> <p>(満-14)クラスメートから耐えられない悪ふざけをされることがある。(*)</p>

*:「被侵害・不適応得点」項目

表2. 協同指標および各原子価に対応する学校不適応観尺度項目

協同指標・原子価	尺度項目
協同指標(Co)	該当項目なし
依存原子価(DV)	(親-22)友だちよりも教師と話すことの方が多い。 (親-26)自分の意見を言わずに他人の意見に迎合したり、周りに流された行動をする。
マイナス依存原子価(-DV)	(親-23)自分の行動に自信がもてなくて落ち込んでしまい、次に進むことができない。 (親-30)授業中にちよつとしたことで涙ぐむ。
闘争原子価(FV)	該当項目なし
マイナス闘争原子価(-FV)	(親-1)反論しない友だちに向かって、傷つく言葉をかける。 (親-2)友だちの悪口を言ってグループの団結を固めようとする。 (親-3)集団を組んで、一人を仲間はずれにする。 (親-4)友だちを中傷するような内容の手紙を回す。 (親-5)友だちをからかったりおどしたりしていじめる。 (親-6)自分の思い通りに友だちが動かないと、相手が泣くまで責める。 (親-8)友だちに命令口調で話し、自分のような扱いをする。 (親-9)注意されたり嫌なことを強制されたりすると、暴力をふるう。 (親-12)学級会で、意見に対してではなく、その個人に向けて反論する。 (親-13)一人ではしないが、集団になると、暴言をはく。 (親-15)順番を守らずに横入りをしたり友だちを押しつける。 (親-40)授業中に、「したくない。」「嫌だ。」とすぐ言う。
つがい原子価(PV)	(親-32)遊びや学習などで、グループの中心になりたがる。 (親-33)友だちや教師に触りたがる。
マイナスつがい原子価(-PV)	(親-7)好き嫌いで友だちに優しくしたり冷たくしたりして態度を変える。 (親-11)友だちの行動に干渉して、文句をつける。 (親-34)参観授業で、興奮して普段と違う行動をする。 (親-35)一人で教室移動ができず、自分の行きたい場所へ友だちを連れて行く。 (親-38)授業中に、授業とは関係のないおしゃべりが多い。 (親-42)授業中に、友だちにちよつかいを出したり話しかけたりする。
逃避原子価(FIV)	(親-19)一人で遊んだり作業をしたりすることが多い。 (親-27)一人が好きで、他人に手助けされることを嫌う。
マイナス逃避原子価(-FIV)	(親-16)学校では、ほとんど友だちと話をしない。 (親-17)友だちが少なく自分からは友だち関係が作れない。 (親-18)友だちに話しかけられると固まってしまい遊びに誘われても入らない。 (親-20)友だちとほとんど話をしない。 (親-21)休み時間に友だちと仲良く過ごすことができない。 (親-24)遅刻して登校しがちである。 (親-25)話をしようとしても、親や教師と視線が合わない。 (親-36)宿題や提出物を期限内に出さない。 (親-37)勉強道具などの忘れものが多い。 (親-39)授業や掃除などの始まる時刻に遅れる。 (親-44)授業中に、教室を抜けだしたり便所にとじこもったりする。 (親-45)特定の教科になると、保健室へ行き授業を受けない。
不特定	(親-10)友だちの持ち物や学校の物を欲しがって隠す。 (親-29)異性を極端に嫌っている。

(観-43)授業中に、授業と関係のないことをして注意を受けてもやめない。
(観-14)席や係などを決めるときに、友だちから避けられる。
(観-31)嫌いなおかずが給食に出されると、体調不良を訴える。
(観-28)偏食が多く、給食を残すことがある。
(観-41)テストは受けるが、意欲を持って学習に取り組まない。
(観-46)授業中にじっとしておれず立ち歩く。

1) 協同指標の特性を表す項目

主観的学校不適応感尺度を構成する3下位尺度のなかで、「学業場面」尺度のうち2項目(表1.の主13, 14)、および、学校満足度尺度のうち1項目(同じく満6)は、学業や学級活動などの現実的課題に向き合う傾向を表していることから、前2項目は逆転項目として、協同指標(CT)の特性に当てはまると考えられる。なお、学校不適応観尺度のなかには、CTを表す項目はみられなかった。

2) 依存原子価の特性を表す項目

主観的学校不適応感尺度を構成する3下位尺度のなかで、「教師との関係」尺度のうち4項目(表1.の主6から9)、および学校満足度尺度を構成する2下位尺度のなかで、「承認得点」10項目のうち3項目(同じく満3, 7, 9)は、教授や世話を受けたり、また友人や教師を頼りにする・されるなどの傾向、すなわち依存原子価(DV)を活動的原子価として有する人が好む、あるいは築く傾向の高い縦的な関係性を表していることから、DVの特性に当てはまると考えられる。

主観的学校不適応感尺度、学校満足度尺度のうち各1項目(同じく主11, 満18)はDVの特性に当てはまると考えられるが、主11は、過剰に低い自己評価、満18は他者からの評価に過剰に依存し過敏に反応する傾向を表しており、マイナス依存原子価(-DV)の特性に当てはまると考えられる。なお、本項目は学校満足度尺度のなかでは逆転項目に相当するため、マイナス原子価尺度が不適応傾向に相当するという原子価論に基づく見解と矛盾するものではない。

学校不適応観尺度を構成する全46項目のうち、4項目(表2.の観22, 23, 26, 30)は、DVに関連すると考えられる項目であるが、2項目(観22, 26)は、縦的關係を好む傾向、および相対的に低い自己評価と高い他者評価という(プラス)DVの特性に、残りの2項目は、過剰に低い自己評価やそれに伴う不安定さを表していることから、-DVの特性に当てはまると考えられる。なお、本尺度は全項目が教師からみて不適応と見なされている内容を表しているため、(プラス)DVとしての評価は原子価論に基づく見解と矛盾するものとなった。

3) 闘争原子価の特性を表す項目

主観的学校不適応感尺度のうち3項目(表1.の主1から3)は闘争原子価(FV)に関連すると考えられる項目であるが、何れも過剰な警戒心や敵意を表していることから、マイナス闘争原子価(-FV)の特性に当てはまると考えられる。なお、学校満足度尺度にはFVの特性

を表す項目はみられなかった。

学校不適応観尺度を構成する全46項目のうち、12項目(表2.の観1から6, 8, 9, 12, 13, 15, 40)は、マイナス闘争原子価に相当する内容を含むものであると考えられる。より具体的にいえば、前10項目は、他者への強いかつ一方的な攻撃・批判、後2項目は、強いかつ一方的な自己主張を表している。

4) つがい原子価の特性を表す項目

学校満足度尺度を構成する2下位尺度のなかで、「承認得点」10項目のうち2項目(同じく満4, 10)が、強い自己アピール、および横的關係を重視する傾向を表しており、つがい原子価(PV)の特性に当てはまると考えられる。なお、主観的学校不適応感尺度にはPVの特性を表す項目はみられなかった。

学校不適応観尺度を構成する全46項目のうち、8項目(表2.の観7, 11, 32から35, 38, 42)は、PVに関連すると考えられる項目であるが、2項目(観32, 33)は、強い自己アピールや親密な関係を好む傾向という(プラス)PVの特性に、残りの6項目は、挑発的な自己アピール、執拗な好奇心、相手を独占しようとする傾向を表していることから、マイナスつがい原子価の特性に当てはまると考えられる。なお、DVと同様、本尺度は全項目が教師からみて不適応と見なされている内容を表しているため、(プラス)PVとしての評価は原子価論に基づく見解と矛盾するものとなった。

5) 逃避原子価の特性を表す項目

主観的学校不適応感尺度を構成する3下位尺度のうち3項目(表1.の主10, 12, 15)は、一定の距離感のある対人関係を表しており、逃避原子価(FIV)の人が好む、あるいは築く傾向の高い関係性を表していることから、FIVの特性に当てはまると考えられる。ただし、後2項目は逆転項目にしくとも(プラス)FIVとして評価され得るものであることから、プラス原子価は適応的言動と関連するという原子価論に基づく見解と矛盾するものとなった。

次に、学校満足度尺度を構成する2下位尺度のなかで、「被侵害・不適応得点」10項目のうち5項目(同じく満15から17, 19, 20)は、FIVに関連すると考えられる項目であるが、3項目(観17, 19, 20)は、クラスメイトや学校という対象と一定の距離感を保った関係を好む傾向を表していることから(プラス)FIVに、残りの2項目は、他者と過剰に物理的・精神的距離感を保とうとする傾向を表していることからマイナス逃避原子価(-FIV)の特性に当てはまると考えられる。

学校不適応観尺度を構成する全46項目のうち14項目(表2.の観16から21, 24, 25, 27, 36, 37, 39, 44, 45)は、FIVに関連すると考えられる項目であるが、2項目(観19, 27)は、対象との距離感や自立性の高さを表していることから(プラス)FIVに、残りの12項目は、対象との過剰な距離感や自己開示のなさを表していることから、-FIVの特性に当てはまると考えられる。

表 3. 原子価論に基づく学校不適応に関する尺度構成

協同指標・原子価	学校不適応感尺度(項目数)	学校満足度尺度(項目数)	計	学校不適応観尺度(項目数)
協同指標	(2)	1	3(2)	0
依存原子価(括弧内は-DV)	5(1)	4(1)	9(2)	4(2)
闘争原子価(括弧内は-FV)	3(3)	0	3(3)	12
つがい原子価(括弧内は-PV)	0	2	2	8(6)
逃避原子価(括弧内は-FIV)	3	5(2)	8(2)	14(12)
不特定	2	8	10	8
計	15	20	35	46

ここまで検討した内容をまとめると、以下のとおりである。

学校不適応感に関する尺度では、DV と FIV はそれぞれ項目数 9, および 8 の間で取り上げられていたが、CT, FV と PV に相当する項目は 3, 3, および 2 項目と少なかった。このことは、学校への適応／不適応や満足度を子どもの立場から扱う際に、課題に向き合う姿勢などの CT に相当する内容、明確な自己主張や競争意識の強さ、統率力など FV に相当する内容、そして横的な繋がりや好奇心など PV に相当する内容が十分に考慮されていないことを示唆するものである。また、FIV のうち 3 項目には、原子価論からみればプラスに相当するが、既存尺度の評価では不適応に相当するという不一致がみられた。このことは、子どもの立場からみて、自立性の高さや他者との距離感などの FIV に相当する言動や態度が不適応に偏って評価されている可能性を示唆するものである。さらに、「教師との関係」下位尺度全 5 項目中 4 項目が DV に相当する内容となっていた。このことから、教師との関係は相互依存的関係が適応的な関係性として評価され、それ以外の関係性は不適応に偏って評価されている可能性もあると考えられる。

学校不適応観に関する尺度で取り上げられていた項目内容は、FIV、FV、PV、DV、CT の順となっていた。特に、FIV と FV に相当する項目が数を合わせると、不特定の項目を除いたうちの約 70% を占めていた。また、FIV のうち 2 項目は、プラス原子価に相当する内容が不適応の指標となっているという不一致がみられた。このことは、教師の立場からみて、DV や PV よりも、FV や FIV に相当する言動や態度が不適応に偏って評価されている可能性を示唆するものである。しかし、プラスとマイナスの不一致は、DV と PV においても各 2 項目ずつみられたため、既存の尺度が主として依存している教師の主観的・意識的な不適応観と原子価論に基づく不適応観との間に一定の格差があることも考慮する必要があると考えられる。

5. 今後の研究課題と方向性

S. Freud をはじめとする精神分析家が治療関係のなかに見出した患者－治療者関係を理解し取り扱うための理論やモデルは、親・子、上司・部下、そして教師・児童生徒などのさまざまな対人関係の問題を理解するために応用されてきた。例えば、Kets de Vries (2004) や M. Maccoby (2005) は、上司－部下関係において生じる問題を、「転移」の問題として論じ、S. Wittenberg (2008) は、同じく転移のモデルで、教師－生徒関係の問題を明らかにしようとする試み

た。つまり、子どもが理想的な「良い」親や迫害的で羨望に満ちた「悪い」親という内的対象を教師に投影同一化することにより、教師は子どもの幻想的な期待に沿うよう無意識的に振る舞うようになる可能性があると同時に、教師自身の理想的な子どもや迫害的で羨望に満ちた「悪い」子どもという内的対象を子どもに投影同一化することによっても、万能的な理解者として、あるいは、羨望に基づく攻撃を恐れる萎縮した奴隷として振る舞うようになる可能性をもっているということである。Bion (1961) による集団理論、そして Hafsi (2010) による原子価論は、単に転移関係というだけでは把握することのできない、どういった自我部分がどういった対象に投影されやすく、対人関係に影響を及ぼしているかについて重要な示唆を与えている。原子価と不適応感および不適応観との関係性が明らかになれば、教師と子どもは自身の対人関係の築き方における強みと弱点を知ることによって調整や修正の努力がしやすくなるだけでなく、より自由に「教師と生徒・・・両者の利益になるような関係」(Wittenberg, 2008; p. 53) を築くことができやすくなると考えられる。

本稿では、主に社会心理学の立場から開発され多くの実証的研究において用いられている学校不適応に関する3尺度について、原子価論の頂点から項目内容の検討を行った。その結果、学校不適応感に関する尺度項目については、FIV がより不適応的、DV がより適応的に評価されている可能性、また、PV や FV は充分考慮に入れられていない可能性が示唆された。また、学校不適応観尺度項目については、FV、および FIV がより不適応的に評価され、不適応評価においてプラス原子価とマイナス原子価の特性が混同されている可能性が示唆された。

原子価論に基づいていけば、4つの原子価類型は、いずれも他者との関係を築くために必要な個人的能力である。健康的な人は皆活動的原子価と補助的原子価とを有するため、用いられる原子価の頻度には個人差があるが、それは不適応の指標とはならず、問題が生じるのは、原子価構造のバランスが崩れマイナス原子価の状態となり、そのために原子価が他者との関係構築や維持、発展に用いられるのではなく、関係性の破壊や破壊的關係の維持、強化に用いられるようになった場合である。この点からみて、既存尺度が特定の原子価の特性を適応的、あるいは不適応的に偏った評価をしたり、プラスとマイナスの側面が混同され評価されているならば、それらは修正される可能性のある課題を含むと考えられる。

このような偏りが生じている要因として、子どもや教師が適応／不適応を評価する際に、自身の原子価、および学級や学校全体を支配する雰囲気や暗黙的なルールの影響を受けている可能性が挙げられる。従って、今後の研究において、これらの点を明らかにしていく必要がある。

まず、教師の原子価と不適応観との関係性を明らかにする必要がある。原子価は職業という対象との関係、つまり職業選択にも影響を与える。教育や福祉、医療に従事する対人援助職は、特に DV を表現し充足することを正当化し理想化する側面をもっている。つまり、DV を活動的原子価としてもつ個人は、低い自己評価を他者に投影同一化し、他者を自身と同様弱く非力で助けを必要としていると認知し、それに合ったように振る舞おうとすることで依存関係を構築し、自身と相手の依存的要求を充足しようとするのである。教師という職業を選択している人に DV の人が多いならば、依存的に振る舞う子どもは教師にとって理解しや

すく対応しやすい、あるいはより適応的に評価される可能性がある。教師が自らの原子価構造と、それに基づく不適應観や子どもとの関係のもちかたの特性を知ることは、より適切な教育臨床的評価を促進し、理想化や聖職幻想の否定的影響を抑えて教師特有と言われる職業ストレスを軽減することにも役立つと考えられる。淵上ら（2005）は、5つすべての不適應タイプを同様に重視することが子ども一人一人に配慮した柔軟性のある指導につながることを指摘しているが、それを目指すことは、各自が活動的と補助的原子価を有することを健全な構造とする原子価論の頂点に基づいていえば現実的とはいえない。従って、自身の原子価に頼らずすべての原子価タイプに相当する学校不適應を評価できるような新たな尺度開発も必要となるであろう。

次に、子どもの原子価と不適應感との関係性を明らかにする必要がある。特にFVやFIVの子どもは不適應感をより強く抱いている可能性があることから、これを明らかにすることによって、そういった偏りを修正するための臨床教育的プログラムを開発することに繋がると考える。

最後に、学級や学校の集団風土、あるいは基底的理想と、教師・子どもの学校不適應観・不適應感との関係を明らかにする必要がある。本稿で検討した結果が示唆することは、依存基底的理想やつがい基底的理想が支配的となっている学級や学校が多いことが、それらに相当する内容をより肯定的に、闘争基底的理想や逃避基底的理想に相当する内容をより否定的に評価している可能性があるということである。筆者の先行研究（黒崎, 2008）によれば、不登校と結びついているのは逃避原子価である。かれらの受け皿となっているフリースクールの多くが、主体性や自主性を尊重を強調しているが、それはFIVの特性、そして逃避基底的理想の特性に相当するものである。このこともまた、学校において逃避基底的理想の表現や充足が許されず抑圧されていることを示唆している。これらのことを明らかにし、バランスを整えるための研修プログラムや尺度開発を行うことは、学校全体の不適應観を修正し、学校不適應の軽減に貢献することに繋がると考えられる。

文献

朝倉景樹, 『登校拒否のエスノグラフィー』, 彩流社.

Bion, W, 1961, *Experiences in Groups and other Papers*, Tavistock Publications, 池田数好（訳）, 1973, 『集団精神療法の基礎 現代精神分析双書 17』, 岩崎学術出版社.

淵上克義・田中由美子, 2001, 教師の学校不適應観に関する研究, 岡山大学教育学部研究録第118巻, pp. 9-19.

淵上克義, 2005, 『学校組織の心理学』, 日本文化科学社.

Hafsi, M, 2006, 対象関係の病理学を理解する頂点としての「マイナス原子価」 - あるマイナス原子価を持った男性の例 -, *プシコフィリア研究* 第3巻, pp. 2-12.

Hafsi, M, 2008, *The Valency Theory: The Human Bond From A New Psychoanalytic Perspective*, 奈良

- 大学紀要第 36 巻, pp. 105-130, 奈良大学,
- Hafsi, M, 2010, 『絆の精神分析－ビオンの原子価の概念から「原子価論」への旅路』, ナカニシヤ出版.
- 勝崎彩子他, 2005, 不登校の原因は、「いじめ」だと思ってしまう? : 不登校児に対する原因帰属と感情, 信州大学教育学部紀要第 115 巻, pp. 167-176, 信州大学.
- 河村茂雄・國分康孝, 1996, 小学校における教師特有のピリーフについての調査研究, カウンセリング研究, 第 29 巻, pp. 44-54, 日本カウンセリング学会.
- 河村茂雄・田上不二夫, 1997, 教師の教育実践に関するピリーフの強迫性と児童のスクール・モラルとの関係, 教育心理学研究第 45 巻第 2 号, pp. 213-219, 日本教育心理学会.
- 河村茂雄, 1999, 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (1) 学校生活満足度尺度 (中学生用) の作成, カウンセリング研究第 32 巻第 3 号, pp. 274-282, 日本カウンセリング学会.
- Kets de Vries, 2004, リーダーシップの不条理, DIAMOND ハーバードビジネス・レビュー編集部編・訳, 『リーダーシップに「心理学」を生かす』, pp. 1-32, ダイヤモンド社.
- Maccoby, M, 2005, 転移の力: フォロワーシップの心理学, DIAMOND ハーバードビジネス・レビュー編集部編・訳, 『リーダーシップに「心理学」を生かす』, pp. 33-70, ダイヤモンド社.
- 小島弘道他, 2002, 『教師の条件: 授業と学校をつくる力』, 学文社.
- 黒崎優美, 2009, 家族グループにおける不登校の発生機序に関する研究－不登校経験者から得られた素材を用いて, 人間文化第 26 巻, pp. 15-30, 神戸学院大学人文学会.
- 文部科学省, 2009, 『平成 20 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について』, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/11/_icsFiles/afieldfile/2009/11/30/1287227_1_1.pdf (2011/12/1 取得).
- 小川和夫, 1956, 学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究, 教育心理学研究第 4 巻第 1 号, pp. 46-54.
- 戸ヶ崎康子他, 1997, 小学生用学校不適応感尺度開発の試み, ヒューマンサイエンスリサーチ第 6 巻, pp. 207-220.
- Wittenberg, S, et al., 平井正三他訳, 2008, 『学校現場に生かす精神分析－学ぶことと教えることの情緒的体験』, 岩崎学術出版社.

謝辞

本稿執筆にあたり、常に研究活動に重要な助言をいただいている奈良大学社会学部のメッド・ハフシ教授、そして、授業やゼミ活動のなかで示唆を与えてくれる学生たちに感謝いた

します。

(受付日 : 2012. 1. 10)